

## マイネッケの自叙傳について

Friedrich Meinecke, *Erlebtes 1862—1901*. Leipzig: Koehler & Amelang 1941, 224 S.  
do., *Strassburg/Freiburg/Berlin 1901—1919*.  
Stuttgart: Koehler 1949, 287 S.

中村貞二

一つの生命、

それは狭い道をあえぎはしたが、

いつも導きの星をみつめて、

底深い運命の力と戦った。

それはいま歩みを止め、

年老いた私たちの前に横わる。

……………  
(マイネッケの妻への献詞より)

祖國ドイツの悲劇的な歴史を生きぬいてきた歴史家、フリードリッヒ・マイネッケ Friedrich Meinecke は、一九五四年二月六日に、殆んど一世紀にわたる長い生涯の幕を閉じた。彼が一生を通じて歴史科学にもたらした成果の豊かに富んでいる

ことはいうまでもないが、その方法と内容を根柢において理解し、また、それらのわれわれに對してもつ限界を意識するためには、何よりもまず、彼がいかなる具體的な状況と精神的な深みにおいて研究に従事したかを知らねばならない。近年のドイツ自由主義思想家のあるタイプを示すと思われるマイネッケの歩んできた道は、しかしまた、總じて社會思想史の分野に多くの素材を同時に提供することができると思えられる。あたかもかかる要請に答えるかのように、彼はその晩年（第二次世界大戦中）、ベルリン西郊外のダーレムにおいて、左の自敘傳二部を書き記した。

1. Erlebtes 1862—1901, 1941.

1. Strassburg/Freiburg/Berlin 1901—1919, 1949.

前者（自敘傳第一部）は、彼の生い立ちから大學の教職につくまでの生活と独自の學風の形成を淡々たる筆致のうちに傳え、後者（第二部）は、それ以後、第一次大戦によるドイツ帝國の崩壊に至るまでの教授生活と政治生活を取り扱って、學風の生成、發展の跡と緊迫した時代の雰圍氣を傳えている。だが、表題をみればわかるように、この二著は彼の生涯を覆う自敘傳ではない<sup>(1)</sup>。彼がすでに他界した今日、その空白は満すべくもないが、第二次大戦後に書き下され、公刊された書、ドイツ軍國主義の成立と崩壊にかんする回想と省察の書、「ドイツの破局」<sup>(2)</sup>が、ある程度これを補うであろう。本稿は右の二著を、初めに述べた意圖に従って、紹介しようとするものであるが、

原著のもつ味と幅は到底ここに映しえられるものではない。このような幾多の制限を伴う紹介であるにも拘らず、自敘傳第一部が現在の日本では殆んど入手不可能であることを考えるならば、本稿もなお、何程かの意義をもちうるであろう。

## I

一、ギムナジウム卒業まで（一八六二—一八七二）。マイネッケは一八六二年一〇月三〇日、ブランデンブルクの小都市、ザルツヴェーデルに生まれた。父は代々の郵便局長を繼いだるが、いわゆるビーダーマイヤー時代に生い立った彼は、保守的で敬虔主義の信者であり、母は神學者の娘であった。マイネッケは、この古い街と静かな家庭で、牧歌的な幼年時代を過した。一八七一年、一家は父の左遷に遭い、新ドイツ帝國のベルリンに移住した。大都市での生活が始まったとはいえ、家庭ではドイツロマン派音楽が日々の精神的な糧になっていた。マイネッケは、「物言わず夢みるような氣分に耽り、さまざまな感情の波に揺り動かされ、表現できない思いに身をゆだねるといふ私の性癖は、こうして養われた」と言っている。ギムナジウムでは初めのうちは模範生であったが、次第に成績が下り始めた。數學的才能はなく、吃りが内攻型の性質を深めていった。一六歳の頃から詩や小説、また文學書の類を亂讀し始め、友人と文學のサークルを組織して活躍した。彼は以後、ラーベ、シュトルム、メーリケをとくに愛するようになり、小説家を志望したことも

あった。彼はその頃、父の願いに反して、汎神論に傾いていた。そしてこのような感覚が歴史への興味を養い、ギムナジウム最  
高學年の興味の中心は、中世ドイツの歴史や汎神論的宗派等であ  
った。當時のドイツには、すでに社會民主主義思想が立ち現  
われてはいたが、彼はビスマルクのドイツ帝國を素朴に信頼  
し、「人間の社会的」*menschlich-sozial*と「より」、*「精神的—個性的」**geistig-individuell*に成長していった。それ  
がまた、一般的な時代の風潮でもあったという。

二、大學時代（一八八二—八六）。大學はベルリンとボンで  
それぞれ一年、最後にベルリンで二年を過ぎたが、全體を通じ  
てもっとも感銘を受けた講義は、老ドロイゼンの歴史學であつ  
た。彼はマイネッケに「歴史的な生」の意味をはっきりと認識さ  
せ、批判的方法を教え、學問的勞作への刺戟を植えた。しか  
し、マイネッケの後年の發展にとって重要な意義をもつのは、  
とくにボンにおける體験と研究であつた。ここで彼は、第一  
に、今までの狹隘な北ドイツ的な視野が果しなく廣がり、自  
己の内部の「組織軟化」*Auflockerung*が始まったことを感じ  
た。第二には、ギムナジウム時代からいまだ続けた彼のドイツ  
學に對する興味が、いまや歴史學へと移つたことである。それ  
は、ドイツ學者ヴェルマンズの講演にヒントをえたマイネッケ  
の着想が、彼の峻嚴な方法的批判を受け、ドイツ學に對するマ  
イネッケのディレクター的、もしくは詩的な氣分が破壊され  
たことにもとづく。だが彼は、歴史學を自己の素質と要求にふ

さわしい學科だと思つた。すなわち、彼は抽象的に思惟する執  
拗さに缺けており、純粹な哲學には手が届かなかつたが、しか  
し、形而上學的な要求をも捨てきれず、現實的なものと精神的  
なものとの觸れ合う領域こそ歴史の世界だと感じたのである。  
こうして彼は、リッター（ボン）によって嚴密な歴史學方法論  
を習得し、コーザー（ベルリン）によってドイツ近世史におけ  
る政治的世界に興味を覺えた。だが當時は、研究上の、とくに  
見定めた目標があつたわけではなく、彼は「霧の中に道を探す  
驟馬」のごとくであつた。學位論文はトライチュケ、ディルタ  
イ等の審査を通過し、マイネッケはプロイセン機密文書庫への  
就職を希望したが、さし當り、メックレンブルクで家庭教師を  
することになった。

三、家庭教師、文書官および私講師の時代（一八八六—一九  
〇一）。家庭教師の半年間に、彼は精神科學の獨自性の問題に  
行き當り、ディルタイをひもといひて感銘を受けた。ディルタイ  
に對し、いまはもう大學時代の難解さを感じなかつたという。  
そのうち、コーザーの推薦と伯父ルドルフ・マイネッケ（プ  
ロイセンの大藏省次官）の世話で、プロイセン機密文書庫への  
就職の希望は、長官ジーベルによって承認された（一八八七年  
四月）。

マイネッケはここで文書官として働くあいだ、終生の友、O.  
クラウスケとO.ヒンツェをえ、彼らは相互の人間の信頼のう  
ちに、歴史における法則、個性、發展等々の歴史哲學的諸問題

を語り合い、啓發し合つた。歴史の個體に對するマイネッケの愛着は、天與といふべきであつたが、彼らとの談合はその感覺を廣く豊かなものとした。文書庫の仕事も彼に快適であり、その間、十七世紀の歴史に關する小勞作を幾つか發表した。しかしこれらはまだ、ドロイゼン、コーザーの學風を繼承したもので、かかる傳統的な政治史の把握には、もはや飽き足らなく感じるようになった。丁度その頃（一八八九年一月）、ジールがポイエンとグロールマンの傳記を書くようマイネッケに勧めたことが機縁で、彼は喜んで「ポイエン傳」に着手し、およそ十年間でこれを完成、その成果は以後彼を捉えて決して離さなかつた。それと同時に、「ポイエン傳」研究のうちに、マイネッケの方法自體も確立していったとみてよいであろう。すなわち彼は、たんなる行爲の連鎖を問題にするだけの政治史のあり方を不満に思い、いまや、個々の政治家の魂の中に深く迫ることによって、政治現象の意味を、独自の仕方で説明しようと思ひ立つた。つまり、個性的な個人によって擔われ、形造られていた理念を、「歴史的生のカンヴァス」と見ようとするマイネッケの精神的な方法が、ここで生まれ出たのである。「ポイエン傳」のなかに盛られたかかる精神的な傾向は、一般に暖かく迎えられるという。あらゆる意味で狹隘な、從來の政治史學を克服することは、まさに時代の要求となつていたのである。

一八九三年には、ジールの願ひで、マイネッケが「史學雜

誌」Historische Zeitschriftの實質的な責任を負うことになつたが、九五年のジールの死を機に、當時すでに集合主義的な歴史記述を主張していたラムブレヒトとのあいだに葛藤が生じ、マイネッケは同誌を彼から守るために、トライチユケに編輯を託した。しかし、トライチユケもまた九六年に急逝し、ここに「史學雜誌」編集の責任は、完全に若いマイネッケが負うところとなり、彼は一群の歴史家とともに、同誌を通じて、ラムブレヒトの方法論的な攻撃に對處した。

一八九五年六月二日に、彼はアントニー・デルヘースと結婚、九六年五月には、ベルリン大學で教授資格を獲得、九六年から九七年の冬學期、同大學の私講師として、ブランドブルク・プロイセン軍制史の講義を行い、「ポイエン傳」第二卷を基礎づけた。しかし私講師の生活と文書官の仕事は、種々の理由からマイネッケを苦しめたらしく、近世史の正教授としてシュトラスブルク大學から招聘されたときには、喜んで新しい任地へ旅立つたのである。

四、シュトラスブルク時代（一九〇一—〇六）。シュトラスブルクに赴任した早々、彼は大學とエルザス地方全體の騷動になつた「シュパン事件」（大學に對するカトリック教會當局の容喙）にまき込まれたが、しかし優秀な教授との交際や、「上部ライン地方文化サークル」（ハイデルベルク、シュトラスブルク、フライブルク、バーゼル、カールスルーエの教授や私講師を中心にした會合）への参加等を通じて、研究意欲が著しく刺

載された。それ以後三十餘年のあいだに公刊された三つの精神史的著作の基礎は、シュトラスブルク時代にえられたという。それらのうち、「世界市民主義と國民國家」第二部の全體と第一部の基本線はここで執筆された。第二部の敘述をしたとき、マイネッケは、ドイツ統一の理念に對するプロイセンの理念の後退を見通していた。「私のプロイセン主義は、シュトラスブルクの空氣の中で失われたとはいえないまでも、それは、ドイツ的になつたのだ」と彼は言っている。そしてまた、フロレンスに旅し、ルネッサンス文化は、優秀な民族、文化および國家の生命が最高度に融け合つたものだとの感銘を受け、それが「ドイツ奮起の時代」を書く動機となつたのも、シュトラスブルク時代の一九〇五年であつた。だがやがて彼は「シュンバーン事件」の餘燼のため、フライブルク大學へ追放され、愛するシュトラスブルクを離れなければならなかつた。

五、フライブルク時代（一九〇六—一四）。とはいへ、フライブルクでの八年間に、マイネッケは落着いて研究を續けることができ、ここでの日々を「私の生涯のうち最も幸福な年月」と回想している。ペロウとH・フィンケおよびマイネッケが歴史學のトリオとなり、研究會を組織したが、彼らはともにラムプレヒトの新しい方法の敵手であり、歴史學の理論的な根本問題については皆同意見であつた。この問題については、リッカートが助力を與え、また彼の義兄弟に當る解剖學の員外教授、F・カイベルとマイネッケは、自然對精神の問題について

論じ合つた。

世紀の變り目から、總じて精神史のための時がうち始めており、マックス・ウェーバーの精神史的諸研究がマイネッケをも刺戟した。彼は、フィヒテ、フムボルト、ノヴァーリス等の思想家に没頭し、「世界市民主義と國民國家」第一部を書き上げ、すでに完成していた第二部とともに公刊した（一冊本）。本書は、ディルタイの關心を惹き、ジムメルの共感を呼び、トレルチの喝采を博した。マイネッケは同書第一部を研究しているあいだに、個性的なものに對する新しい感覺を、近代的历史意識の源泉とみ、このものはまた、近代國家の具體的な利害關心と結びついているのではないかと考へつたといふ。

しかし、フライブルクでの生活の大半を捧げた研究は、コーザの要請から始められた「ラドヴィッツ傳」であつた。本書に對して、マイネッケは「ボイエン傳」よりも満足しており、批評もふたたび好意的であつた。彼はラドヴィッツを、彼の兩親の家の世界でもある「キリスト教的—ゲルマン的世界」の創始者とみなしており、「ゲルラッハ論文」と同じく、「ラドヴィッツ傳」を通じてこの世界の精神と生活の解明を試みようとしたといふ。

一九一三年の終りにはボン大學から、一四年二月にはベルリン大學から、彼は招聘を受け、ベルリンの方を選んだ。彼は、ベルリンに行けば生の幸福はなくなるかもしれないが、生の内實をえるだろうと自らに言いかけた。ドイツの將來は暗く、

彼はすでに政治の分野に進出していた。そして、およそ半年後に、第一次世界大戦が勃發したのである。

六、ベルリン時代（一九一四—一九一五）。マイネッケは一九三二年にその地位を追われるまで、ベルリン大學の教授として活躍した。彼の就任と殆んど時を同じくして（一九一五年）、當時マックス・ウェーバーに比肩しえた唯一の人、トレルチが歴史哲學の教授としてベルリン大學に赴任してきた。彼とマイネッケは、共通の政治的、學問的關心をいだいていたので、二人はたびたび語り合い、マイネッケはトレルチから多くのこと、とくに歴史主義の問題について學ぶところがあった（もともと、政治的には、戦後二人のあいだに若干の喰い違いが生じたようである）。當時彼らを中心にして集った實にさまざまな學問的會合は、しかし同時に、大戦下のドイツにおける内外の政治問題を論じ合うものであった。

大戦は十分な教職活動を行わさなかったが、「プロイセン科學アカデミー」は盛況を極めた。マイネッケはベルリン大學就任早々、アカデミーの會員になることができ、以後ここで多くの講演を試みた。一五年のアカデミー會員就任の講演では、恆例のごとく、彼も研究経過と研究計畫を述べた。計畫は、「世界市民主義と國民國家」の研究のうちにえたヒントを發展させること、すなわち、近代國家の權力政治の形成、發展と近代的歴史意識の成立という二つの問題を、個性的かつ具體的な國家の利害關心に對する感覺で媒介することによって「統合」し、

かくて例えば「國家統治と歴史觀」*Staatskunst und Geschichtsfaassung* という一冊の書物を公刊することであつた。<sup>(1)</sup>だがドイツの崩壊は、マイネッケがそのすぐれた感覺と内實に信頼をおいていたところの權力政治の暴力政治への墮落を、彼に否應なしに意識せしめ、右の二つのテーマは、それぞれ變質をとげつつ、ともにその權利を主張することになつたといふ。もっともこの計畫の變更は、（第一次）大戦後になつて初めて明確に意識せられたのである。

マイネッケが戦前および開戦當初、權力政治の含む問題性やとくに全ドイツ黨の「墮落した國民主義」を憂慮し、それに警告を發しなかつたといふのではない。彼はボイエン研究以來、「精神と權力」の二つのドイツが、解放戦争時代には提携し合つていたのに、漸次別々の道をとり始めたこと、プロイセン軍國主義が「怖るべき傾向」をもっていることを知っていたといふ。とはいえ彼は、この二つのドイツがふたたび互いに他を求め合い、終に「八月の日の昂揚」（大戦勃發）として結合し、二つのドイツの「兩極性の緊張」がより高度の歴史的统一をなしとげたのではないか、と思つた。しかし、この點でプロイセンドイツの世界をなおも「不完全な」世界だとみるならば、そのときには、歴史の「回復力」、ドイツやヨーロッパの本質を墮落から守っている「回復力」に期待するより他はないといふ「歴史哲學的慰撫」をいだかざるをえなかつた、彼はこのように言っている。だがいまや、總じてマイネッケの現實政治的行

爲の感覺と内容を一瞥しなくてはならない。

一八九〇年の頃は、現實政治上の事柄に彼の心は向かなかつたが、しかし「個人的自由と國家的束縛」という「無時間的な」問題には行き當つており、これを緊張と對立において捉えはするものの、兩者は究極において統一されるものと信じていた。彼元來のユダヤ人嫌いや保守的なプロイセン主義は、しかしポイエン研究のうちに、次第に寛容になっていったという。そして九五年には、保守黨に對して明確な不信の念をいだくに至つた。だが彼は、「社會主義的な未來國家」に希望をつなぐことはなかつた。そして、當時出現したF・ナウマンの社會改良主義的努力に強い共感を覚え、ドイツが世界政治の舞臺に乗り出すために、労働者階級と市民階級の架橋を目標として、中立的な大國民政黨を作り上げるといふナウマンの考え方を支持したようである。今世紀初頭の幾つかの選挙で、自由主義政黨と社會民主黨が提携したことを彼は喜んだ。一年には宰相ベートマン・ホルヴェークの國內政治が國民の内部分裂をもたらすものとみてこれに反對、一二年の帝國議會選挙には、同僚のペロウ等との對立があつたのにも拘わらず、「ナウマン主義者」、シュルツェルゲヴァーニッツを候補者に推し、中央黨を敵にして、文書による多彩な政治活動の渦中にはいつた。

だがマイネッケが、祖國の急を救うために、政治の大海に乗り出したのは、何よりも第一次大戦中のベルリンにおいてであつた。マイネッケらの學者グループをはじめ、各界の指導層は、

「一九一四年の精神」という共通の紐帯で結ばれて、「一九一四年のドイツ協會」Deutsche Gesellschaft von 1914その他に活潑に参加した。彼らは、戰爭目的を國民經濟上不可缺の植民地獲得に限定し、全ドイツ主義者の「ディレクタンティズム」や祖國黨の「盲目的なエゴイズム」に對して戦い、軍部の無思慮や政治化を批判し、國內戦線の強化に心を碎き、到るところで時局講演を行い、あるいは敗戦を見越して「無賠償、無併合の講和」Verständigungsfriedeを主張した。

マイネッケは大戦中に、實さいの政治に携わっているものと交際する機会をえた。すなわち、一五年秋から外交官キュールマンと個人的に談合し、また、以前には彼がその政策を批判した宰相ベートマンとの交際も一六年六月から始まつた。彼もマイネッケと同じく、「過激な愛國主義的」全ドイツ的心情の擴大を恐れていた。彼らは、多數派社會民主黨の「國民的本能の缺除」等には反撥しながらも、その現實政治化をともに望み、あるいは非民主的なプロイセン三級選挙法の改正の問題その他を論じ合つた。マイネッケが國內戦線の強化をめざすこれらの内政改革問題に没頭したときには、ボルシェヴィズムの「脅威」がドイツに波及することを恐れていたということも看過されてはならない。彼はこのように民主主義的改革を主張したとはいへ、君主制の廢止には同意せず、「君主制を滅ぼすような君主」(ヴィルヘルム二世)の退位を望んだのである(彼カイザーへの不信は一八九〇年代から、他の民主主義的論客と同じく、い

だき續けていた。そして休戦後も、純粹な議會主義に異を唱え、政黨活動を正しく導く強力な中央權力の存續を望み、アメリカ合衆國の大統領制(彼はこれを「代理帝制」Ersatzkaiser-tumと呼んだ)を戰敗國ドイツが受け容れることを望んだ。

マイネッケが敗戦と革命の前に動搖しなかつた筈はない。無分別な軍國主義とボルシェヴィズムは、「二つの重石」のごとくに、古い秩序を壓し潰そうとしていると彼には思われた。彼はシュペングラールに先立って「西歐の没落」を語りもしたが、しかしドイツの回復力への信仰を放棄することはできなかった。彼が第一次大戦前後の自己の政治的努力の意味について遺した次の言葉は、大層含み多いものと思われる。「私の政治感覺は、早く言えば、二つの國民から一つの國民を作ることである」(一九一九年二月九日の日記)。

## II

われわれは、一九一九年初めまでのマイネッケの生活と思想を、彼の自叙傳によって紹介してきた。だが自叙傳第二部の結びは、「結論的考察(一九四三—四四)」と題されており、そこでは老マイネッケが、歴史家として、過去のドイツと自らに反省を加え、かつ國民教育家として、將來のドイツとドイツ民族に對する願望を述べ、信仰告白を行っているのである。これを以下に要約するとともに、少くとも自叙傳におけるマイネッケの回想を往年の彼の思想と比較することによって、彼晩年の世

界觀を見定めておくことは、また紹介者の義務であらう。

第一次世界大戦中の自己の努力と期待が裏切られ、また、ワイル共和國が「不名譽にも」破れ去って、ナチス政權の確立、第二次世界大戦の勃發を見たマイネッケは、十九世紀以來の歴史のなかに、「運命的に」働く「超個人的な諸力」を見、その意味を重視しないわけにはゆかなくなつた。しかし、第一次大戦までの權力政治を挫折させるに至つたことの究極の原因を、彼は、ドイツ的人間の素質のなかに見ていることが重要である。ここから彼は、とくに市民階級の罪について語ることができた。そして彼もまた、市民階級の一員として、深刻な反省を行つた。すなわち、彼はおよそ次のように言っている。

ビスマルクと彼の教えは、われわれ(マイネッケ達)の思考や努力の前面に立っていたとはいへ、ゲーテの世界は、そのさい「自明の補充物」として考慮されていた。しかし、「ゲーテとビスマルクの遺産をわれわれのうちに調和的に結合し、かくて精神と權力の新たな綜合に到達することは、私が多く同世代の人々とともに戦前に夢みた夢であった。」一九一四年以來の道は、ますます暗く、長く、苦しくなつた。いまや、精神は權力に對して優位に立たねばならない。精神こそは、人間を、人間としての最高存在たらしめるものだから。したがって、かつてない程に脅かされているところの、よきヨーロッパ精神にまで自己を高めるようなドイツ精神を救い出すこと、これが後世の人に傳えたい私(マイネッケ)の切實な願ひである。われ



われを閉じこめている牢獄の扉は、いつか開かれるであろう。そして、これを希望し、これを信じるためには、無限に變化する歴史的生のなかにある「變化しない導きの星」に憧れることが大切である。

およそ以上のように述べて、彼は自叙傳を終っている。

### III

さて、第一次大戦の苦い経験は、彼に権力政治の問題性をはっきりと意識させ、國家理性の研究に没頭させたが、彼がいま一度の世界大戦の勃發を見たとき、その問題はますます重く彼の心に懸らざるをえなかったであろう。かかる境遇で自叙傳が書かれるとき、それは彼の後年および晩年の思想で強く色どられずにはおかないであろう。

われわれはさきに(註一三)、自叙傳における「精神と権力」の記述についての疑點を指摘しておいた。自叙傳に示されたように、第一次大戦前および開戦當初、はたして「精神と権力」が矛盾し、抗争し合うものとして彼に意識されていただろうか。いな、當時「精神と権力」を兩極に分けてみる必要をすら彼は感じなかったのではあるまいか。實さい、ドイツとドイツ民族に對するそのような見方を淺薄な經驗論として退けるのは、むしろマイネッケ自身だっただのではないだろうか。

「世界市民主義と國民國家」では十八世紀終り以降のさまざまなドイツ政治思想の流れが、ドイツ國民國家思想の形成に向

って、すべて積極的に評價され、おのおのその位置を與えられているのであって、そこには「精神と権力」の分裂の意識は何ら見當らないのである。本書より七年後に書かれ、マイネッケが自叙傳でのその説明において「精神と権力」をとくに問題にしているところの「文化、権力政治および軍國主義」の實さいの記述をみると、そのことはますます明らかになる。そこでは、「眞正の文化」が人間生活の一領域に留まるものではないと述べられた後に、國家間の権力政治では、私的道德に先立って「人民の安寧が最高の法たるべし」と主張され、解放戰爭當時のドイツとビスマルク・ドイツの同一性が説かれ、「ドイツ軍國主義」がドイツ文化の一部であると言われている。いな、「世界市民主義と國民國家」においても、すでに「國家の權力的利己主義」が倫理的にも是認されていることを、われわれは見逃さないだろう。

これらの著作には、英・佛等の先進諸國に對抗して、ドイツをあらゆる意味で「世界民族」にまで高めようとしたマイネッケの意欲が豊かに波うっており、そのような價值關心に基いて彼の學問的、政治的勞作が生まれたのである。したがってその當時、マイネッケの意識のなかでは、「精神と権力」の兩極性が問題的なものとして現われることがなかった。恐らく兩者は、內的に組み合わされて一體をなし、ドイツ國民國家の成立に參與し、またその完成に奉仕するものと捉えられていたにちがいない。このような意識を「プロイセン主義」と規定するには多

くの問題があるが、しかし、彼の生い立ったプロイセンの世界、彼の師のプロイセン學派の精神の影響は、抜き難く彼の思考を方向づけていたと言いうるのではないだろうか。だから一八年一月初旬に書かれた「革命の前夜」<sup>(16)</sup>においては、ドイツの過去への批判が明瞭な形で現われたのである。だが「自己と自己の過去を批判することは、これらを否定することを意味するわけではない」<sup>(17)</sup>。マイネッケはマックス・ウェーバーに抗議して、「國民國家の完全な理念は、祖國が子孫並びに祖先の土地であることを要求している」<sup>(18)</sup>（傍點筆者）と言った。そこで彼が第一次大戦後、ドイツの過去から救い出そうとしたものは、プロイセン改革時代と解放戦争當時の自由な國民的感覚であった。そしてこのとき、彼はビスマルクの誤謬をはつきりと認めた。こう見てくると、「精神と權力」に對する彼の問題意識は、大戦の経過のうちに熟してきつつあり、帝國の崩壊をみたとき、これが初めて彼の學問的關心の中心に据えられたものではあるまいか<sup>(19)</sup>。

第一次大戦後三十年のあいだに、「精神と權力」に對するマイネッケの考え方がいかに變つてきているかということの検討は、また別の機會に譲る以外にはない。しかし、自敘傳の内容を明確にするために、次のことだけは記されねばならぬ。すなわち、ヒットラー時代の悲劇的な結末をみた老マイネッケは、「權力」の現代的なあり方は、いまや權力國家のなかにではなく、「ヨーロッパ聯邦」のなかに體現されねばならぬと考え始め

たこと、いなむしろ、「權力」は「精神」に奉仕するところにその積極的な意義を見出されているということである。第二次大戦を経て、彼がドイツの過去から救い出そうとしたものは、したがって、キリスト教というヨーロッパの共有財産、およびとくにゲテ時代の精神文化であった（ドイツの破局）。なぜなら、ゲテ時代の文化遺産こそ、もっともドイツ的・個性的であると同時に、もっともヨーロッパ的・普遍的であると彼は信じているから。

自敘傳の到るところに盛られたのも、マイネッケのこのようなヨーロッパ的かつドイツ的な心情であった。そして彼が、死を前にしても、このような祖國における「神的な」業績の所在を示しえたとき、彼は、生涯を通じてよく國民教育家であり續けたことを自ら證據立てた。そして、この國民教育家の感覚こそ、自敘傳によっても個性的な時代の動きを伝えようとした彼の歴史家の感覚を支え、かつ養い上げたものであった、と思われるのである。

(1) マイネッケの生涯を要えて概観したものに次の論文がある。Walter Goetz, „Friedrich Meinecke—Leben und Persönlichkeit,” in: Historische Zeitschrift (以下 HZ. と略す), Bd. 174, 1952, SS. 231—250. 筆者ゲツツは一八九四年以来、學問と政治において、マイネッケの終生渝らぬ友であった。この論文は、マイネッケに對す

の深き愛情と尊敬を以て書かれたのである。

(2) Die deutsche Katastrophe. Wiesbaden: Brockhaus 1946, 4. Aufl. 1949, 181 S. 本書は、公刊後直ちにドイツ人の「ナチズム」イタリイ、イギリス、フランス、日本の各言語に譯出されて、國際的な反響を呼んだ(邦譯は、矢田俊隆譯「ドイツの悲劇」、弘文堂ブテ新書「昭和二十六年」)。なお、本書の意圖と方法は、自叙傳のそれと本質的に同一である。

(3) Das Stralendorfsche Gutachten und der Jülicher Erbfolgestreit. Berlin 1886.

(4) Das Leben des Generalfeldmarshalls Hermann von Boyen, 2 Bde. Stuttgart 1896/99.

(5) 「フンケマンの「民族雜語」に關する其體」について、Ludwig Dehio, „Abschied von Friedrich Meinecke,“ in: HZ. Bd. 177, 1954, S. 225f. を参照のこと。

(6) Weltbürgertum und Nationalstaat. Studien zur Genesis des deutschen Nationalstaates. München 1908.

(7) Das Zeitalter der deutschen Erhebung (1795—1815). Bielefeld 1906.

(8) Radowitz und die deutsche Revolution. Berlin 1913. 444頁。„Zur Kritik der Radowitzschen Fragmente,“ in: Karl Zeunzer zum 60. Geburtstag. Weimar 1910. Wiederabdr., in: Preussen und Deutschland

im 19. und 20. Jahrhundert. München 1918.

(9) „Die Tagebücher des Generals v. Gerlach,“ in: HZ. Bd. 70, 1893. 444頁。„Gerlach und Bismarck,“ in: HZ. Bd. 72, 1894. 249頁。Preussen und Deutschland usw. に收録。

(10) なお、本講演の記録をみるべし、この二つのテーゼの「統合」は明確な形を述べておられるが、「精神史的方法」に關してリヒャルトの立場から自由に反省を加えようとするものは、E. H. Carr (Vgl. Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. Berlin 1915. SS. 496—498.)。

(11) Die Idee der Staatsräson in der neueren Geschichte. München 1924. 444頁。Die Entstehung des Historismus, 2 Bde. München 1936.

(12) これは自叙傳と法の論文を説明しようとする箇所である。„Kultur, Machtpolitik und Militarismus,“ in: Deutschland und der Weltkrieg. Leipzig 1915. Wiederabdr., in: Preussen und Deutschland usw. 444頁。ヘンターは次のように言っている。「大戦は、國民が受けた靈感のよみがえり、彼らは思われ、遂に解放戦争時代の愛國者の努力と希望の「一世紀後の實現」と認められたのである」(Carlo Antoni, Vom Historismus zur Soziologie, übersetzt von W. Goetz. Stuttgart 1950. S. 139.)。

(13) マイネッケが開戦當初、すでにプロイセン・ドイツの「不完全性」を真鋭に感じとり、「歴史哲學的慰撫」を必要としたかどうかは、はなはだ疑わしい。大戦の経過が彼に、この認識と必要を強いたのであるまいか。

(14) ナウマンは一八九六年、「プロレタリア社会主義とドイツ國民主義の融合」をめざす國民社会主義同盟を組織した。彼は、ドイツ民族の自己主張のために、——マイネッケの言葉で言えば——「精神」よりも「權力」をとった

(Vgl. Theodor Heuss, Friedrich Naumann. Der Mann, das Werk, die Zeit. 2. neubearb. Aufl. 1949, S. 122f.)。第一次大戦前後のナウマンの政治に對する感覺と行動をみても、マイネッケが彼に同調する理由がわかるのである。だが逆にナウマンは、ドイツ國民國家思想の形成、發展を追求したところの、今世紀初頭のマイネッケの精神的諸研究によって、彼自身の歴史的地位に對する認識を深め、また、(トレルチ、マックス・ウェーバーと並んで)彼から學問的刺戟を受けている (Vgl. Heuss, *ibid.*, S. 241, 314f.)。

(15) 第一次大戦中および戦後の政治論の多くは、Die deutsche Erhebung von 1914, Stuttgart 1914, Probleme des Weltkrieges, München 1917, Preussen und Deutschland usw. 等に Nach der Revolution, München 1919. に収録されている。

(16) „Am Vorabend der Revolution,“ in: Nach der Revolution.

(17) *ibid.*, S. 2.

(18) „Drei Generationen deutscher Gelehrtenpolitik,“

in: HZ, Bd. 125, 1922, S. 283.

(19) 上原專祿「マイネッケのランゲ批判」(一橋論叢、第三卷第四號、二五—四二頁)、『Antoni, *ibid.*, S. 140—144, 147; Walther Hofer, Geschichtsschreibung und Weltanschauung——Betrachtungen zum Werk Friedrich Meineckes, München 1950, SS. 25—37. 等々参照

を参照。

(20) 上原專祿「Die deutsche Katastrophe, 1914, „Irrwege in unserer Geschichte?“ Der Monat 13, Okt. 1949. Wiederbar., in: Vom geschichtlichen Sinn und vom Sinn der Geschichte, 5. Aufl. Stuttgart 1951. 等を参照を参照。

——一九五六・一一・七——

(一橋大學大学院學生)